HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	人間の復権
著者	船岡，誠; FUNAOKA，Makoto
引用	年報新人文学(8)：2-4
発行日	2011-12-22

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

[巻頭言]

人間の復権

船岡　誠

わが人文学部の創設の理念である「新人文主義」、これを菱川善夫は「古いものの価値を現代の目で再評価し、未来へつないでいくこと」（『人文フォーラム』一八号）とし、大濱徹也は「人間が人間であるとは何かを問い質さんとするもの」（『新人文学』一号）とし、私は「歴史における人間の復権」と受け止めた。

一九五五年に「なぜ私たち国民が戦争にまきこまれ、おしながされたのか、なぜ国民の力でこれを防ぐことができなかったのか」という関心のもとで執筆・刊行された『昭和史』（岩波新書）に、「この歴史には人間がいない」「『国民』という人間不在の歴史」とかみついたのは文芸評論家の亀井勝一郎であった（「現代歴史家への疑問」『文藝春秋』一九五六年三月号）。亀井には唯物史観にたいする不信感・嫌悪感があった。この亀井の発言をきっかけに、文学者・政治学者・歴史学者を巻き込んだいわゆる昭和史論争が展開された。

一方それ以前、戦後まもなく文芸誌『近代文学』の同人たちによる問題提起からはじまったのがいわ

ゆる主体性論争であった。作家は「民衆のための教師」になるべきだという蔵原惟人の意見（「新しい文学への出発」『東京新聞』一九四五年一一月一〇、一一日号）に反対し、『近代文学』の同人本多秋五が、芸術は芸術家の「魂の諸要求」を完全に満足させるものでなければならず、その「魂の諸要求」とは私＝個人の内部から噴き出る情熱にほかならないと問題提起したのである（「芸術・歴史・文学」『近代文学』創刊号、一九四六年一月）。当初は文学上の論争であったが、まもなく哲学をはじめ広範な領域で主体性が問題になっていく。

村松一人の「哲学における修正主義」（『世界』一九四八年七月号）での批判に答えて、梅本克己は「主体性の問題は、階級的利害の対立と搾取者に対する本能的憎悪に出発するマルクス主義の科学的原則が全面的に承認せられた上で、この階級的個人と歴史との内面的なつながりの自覚の領域に提出される。唯物史観の主体的な把握もこの領域の裏付けをもっての上でであろう」と主体性の根拠そのものを問題とした（「主体性と階級制」『理想』一九四八年一一月号）。

もちろん戦後生まれの私にとってこれらの論争は過去のものである。一九六九年四月に大学院に入り歴史を勉強しはじめたが、そのころ時代は「政治の季節」であった。学びはじめた歴史学はマルクス主義歴史学の全盛のように当時の私には思えた。唯物史観を勉強しはじめた。「下部構造が上部構造を規定する」「歴史の必然」「世界史の基本法則」「宗教はアヘンなり」……。その一方で、西田哲学や鈴木禅学に関心をもち、大学院での研究テーマを禅宗思想史と決めていた私にとって、唯物史観にのめり込むこともできなかった。西田哲学の影響を受けたマルキスト梅本克己に惹かれたのもそんな事情からかも知れない。当時の私にとって主体性論争は決して過去のものではなかったのである。

そんなおり、丸山真男の「歴史意識の『古層』」（日本思想六『歴史思想集』筑摩書房、一九七二年）を読んだ。衝撃であった。丸山は、「記紀以来の歴史的発想と記述様式の基底に執拗に流れつづけた『持続低音』」を歴史意識の「古層」とした。その「持続低音」とは「つぎつぎになりゆくいきほひ」であり、なにか歴史が自然と動いてゆくイメージで、ここからは「なす」主体がみえてこない。丸山は『愚管抄』の「世の中の道理の次第に作りかへられて」を引き、この表現に「つくりかえる主体が不明確なこと」に注意を喚起しているが、日本人の歴史意識に主体性論争や昭和史論争で問題とされたことに通底する何かを感じ取っていたのかもしれない。

だがそうだろうかという疑念も拭い切れなかった。私はかつて「紫衣事件と沢庵宗彭」（『駿台史学』三四号、一九七四年三月）で、紫衣事件における沢庵と崇伝の果たした役割を検討し、沢庵と崇伝というふたつの主体のぶつかり合いのなかで紫衣事件を考えたことがある。というのは崇伝に関し、辻善之助の「是の時に当つては、崇伝は単に一寺一宗の崇伝にあらずして、実に幕府の崇伝である」（『日本仏教史』八、岩波書店、一九五三年、二六〇頁）という評価があったからである。「幕府」という一般に解消することなく、崇伝に一方の「主体」をみようとしたのである。

（ふなおか　まこと・北海学園大学教授）